慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近代フランス文学における歴史表象の美学と思想
Sub Title	Aesthetics and thought of historical representation in modern French literature
Author	小倉, 孝誠(Ogura, Kosei)
Publisher	慶應義塾大学
Publication year	2021
Jtitle	学事振興資金研究成果実績報告書 (2020.)
JaLC DOI	
Abstract	近代文学、とりわけフランス文学において、歴史を描き、語ることは重要な課題だった。フランス革命以後、多くの社会変動を経験したフランスにおいて、作家たちは歴史の意味と方向性を問いかけざるをえなかったからである。同様にして、19世紀の歴史家たちもまた、国民や国家の起源を問うことで、近代の歴史学を確立していった。その意味では近代フランスにおいて、文学（とりわけ小説ジャンル）と歴史学は、歴史の流れを読み解こうとした点で相互補完的だったことを確認できた。 個別の論考やシンポジウムで考察したのは、以下のようなテーマである。 １）少年時代からロマン主義歴史学に親しんでいた作家フロベールは、壮年期に2篇の歴史小説を著わす。『サラムボー』（1862）は古代カルタゴの内乱を主題にして、文明と野蛮の対立を語り、19世紀フランス社会の状況を彷彿させる。『感情教育』（1869）は、1848年の二月革命を物語の主要エピソードに据えて、それをフランス大革命の滑稽なパロディーとして描きだした。両作品に共通するのは、歴史の進歩という思想に対する懐疑である。この点は「文学と認識論」で詳述した。 ２）エミール・ゾラは第二帝政期（1852-70）を時代背景とする一連の小説を書いた。そこに通底するのは、革命後の近代フランスは欲望と野心がぶつかり合い、さまざまな社会集団の利害が衝突するなかで社会と歴史が動いていくという、きわめてダイナミックな歴史観である。この点を『世界文学へのいざない』に収めたゾラ論で論じた。 ３）最後に、現代文学の特徴は、作家たちがとくに第二次世界大戦を舞台として、独自の歴史解釈を提示する作品を発表し、他方で、歴史家のほうはそれに触発されたかのように、文学的な技法や語りの構造を援用して、歴史叙述の新たな地平を開拓していることである。その点を、仏文学会のシンポジウム「文学と歴史（学）の関係を問い直す」の発表で論じた。 In modern French literature, it is often a question of telling and representing history. France is going through a century full of social and political upheavals following the Revolution and writers claim to interpret the meaning and scope of the historical process. Nineteenth-century historians, too, question the origins of nations in establishing modern historiography. Literature and history are therefore in a complementary relationship to the extent that they both believe in the intelligibility of history. I have tried to show how and from what perspective certain 19th and 21st century authors represented history. 1) Interested in history from his childhood, Flaubert was skeptical about the idea of progress in history in his two historical novels: Salammbô and L'Education sentimentale. 2) In his novels, the action of which takes place under the Second Empire, Émile Zola has highlighted a historical dynamism that shakes up multiple desires and ambitions. 3) Today's writers often recount World War II, and they claim to compete with historians in formulating a historical view.
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=2020000008-20200068

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2021 年 4 月 4 日

2020 年度　学事振興資金（個人研究）研究成果実績報告書

研究代表者	所属	文学部	職名	教授	補助額	200 （B） 千円
	氏名	小倉 孝誠	氏名 （英語）	Kosei Ogura		

研究課題（日本語）

近代フランス文学における歴史表象の美学と思想

研究課題（英訳）

Aesthetics and thought of historical representation in modern French literature

１．研究成果実績の概要

近代文学、とりわけフランス文学において、歴史を描き、語ることは重要な課題だった。フランス革命以後、多くの社会変動を経験したフランスにおいて、作家たちは歴史の意味と方向性を問いかけざるをえなかったからである。同様にして、19 世紀の歴史家たちもまた、国民や国家の起源を問うことで、近代の歴史学を確立していった。その意味では近代フランスにおいて、文学（とりわけ小説ジャンル）と歴史学は、歴史の流れを読み解こうとした点で相互補完的だったことを確認できた。

個別の論考やシンポジウムで考察したのは、以下のようなテーマである。

1）少年時代からロマン主義歴史学に親しんでいた作家フロベールは、壮年期に 2 篇の歴史小説を著わす。『サラムボー』（1862）は古代カルタゴの内乱を主題にして、文明と野蛮の対立を語り、19 世紀フランス社会の状況を彷彿させる。『感情教育』（1869）は、1848 年の二月革命を物語の主要エピソードに据えて、それをフランス大革命の滑稽なパロディーとして描きだした。両作品に共通するのは、歴史の進歩という思想に対する懐疑である。この点は「文学と認識論」で詳述した。

2）エミール・ゾラは第二帝政期（1852-70）を時代背景とする一連の小説を書いた。そこに通底するのは、革命後の近代フランスは欲望と野心がぶつかり合い、さまざまな社会集団の利害が衝突するなかで社会と歴史が動いていくという、きわめてダイナミックな歴史観である。この点を『世界文学へのいざない』に収めたゾラ論で論じた。

3）最後に、現代文学の特徴は、作家たちがとくに第二次世界大戦を舞台として、独自の歴史解釈を提示する作品を発表し、他方で、歴史家のほうはそれに触発されたかのように、文学的な技法や語りの構造を援用して、歴史叙述の新たな地平を開拓していることである。その点を、仏文学会のシンポジウム「文学と歴史（学）の関係を問い直す」の発表で論じた。

２．研究成果実績の概要（英訳）

In modern French literature, it is often a question of telling and representing history. France is going through a century full of social and political upheavals following the Revolution and writers claim to interpret the meaning and scope of the historical process. Nineteenth-century historians, too, question the origins of nations in establishing modern historiography. Literature and history are therefore in a complementary relationship to the extent that they both believe in the intelligibility of history.

I have tried to show how and from what perspective certain 19th and 21st century authors represented history.

1) Interested in history from his childhood, Flaubert was skeptical about the idea of progress in history in his two historical novels: Salammbô and L'Education sentimentale.

2) In his novels, the action of which takes place under the Second Empire, Émile Zola has highlighted a historical dynamism that shakes up multiple desires and ambitions.

3) Today's writers often recount World War II, and they claim to compete with historians in formulating a historical view.

３．本研究課題に関する発表

発表者氏名 （著者・講演者）	発表課題名 （著書名・演題）	発表学術誌名 （著書発行所・講演学会）	学術誌発行年月 （著書発行年月・講演年月）
小倉孝誠	世界文学へのいざない	新曜社	2020 年 6 月
小倉孝誠	文学と認識論――フロベールと歴史のエクリチュール	慶應義塾大学日吉紀要	2020 年 10 月
小倉孝誠	文学と歴史（学）の関係を問い直す	日本フランス語フランス文学会秋季大会	2020 年 10 月